

アミーゴ会だより

2013年4月
通巻第14号
季刊2013年-II



発行人：上原尚剛
編集人：河嶋正之
 鴻巣勝明
事務局：笠井道彦

西日本活動報告

中原孝三氏の講演会に参加して

～メキシコ滞在40年：メキシコとメキシコ人を語る～

メキシコ・日本アミーゴ会
西日本代表 鹿内 竣一

去る一月二十五日（金）、大阪 JR 福島駅近くの、ホテル阪神で、中原孝三氏による「メキシコ滞在40年の経験を通して観たメキシコ、メキシコ人について」と言う題名の講演会が行われました。

このご講演の発端は、年末に行われた西日本地区の幹事会の席上で、新しく幹事になられた、瀬山さんから提案があったもので、中原さんとの現地での交遊関係を縁に、ご本人の同意を得て実現したものです。

当日は、西日本地区の本祭（毎年9月に、大阪でのフィエスタ・メヒカーナのお祭りに合わせて実施）を越える30人弱の方たちをご来場されました。メキシコ料理ならぬ中華料理のレストランで行いましたが、ご講演のあと、皆さん広東料理とワインや紹興酒などのお酒を十分楽しんで頂いたようです。



中原さんのご講演をお聴きして、中原さんの生き方は、一言で言えば「独立不羈、自分の信じる道を歩む」と言った人生ではなかったかと思えます。大商社に入って間もなく、豪州での片目の失明、メキシコでの12年間の商社マンとしての大いなる活動、帰国して間もなくの自主退職とメキシコへの再入国、そしてご自身で立ち上げた貿易商社の輸出への貢献で、セディージョ大統領から国家輸出最優秀賞を授章、またメキシコ市のエスピノ市長から輸出貢献賞を受賞されるなど、波乱万丈の人生を送られて来ました。

メキシコ人との公私に亘る長い付き合いを通じて、メキシコ人のことを冷静に、また鋭く観察されており、一般的に言われている、メキシコ人は親日家という言葉は必ずしも正しく無い事も分かりました。日本からのメキシコへの出張者の現地の礼儀を無視した振る舞いや、しぐさ、服装なども私が海外で経験した事との共通性を感じることが出来ました。

例えば、私がメキシコではなく、イタリアに住んでいた時の経験ですが、日本からの出張者や取引先方の多くは、イタリアでスパゲッティと各種のスープを注文されます。然しながら、食事中に平気で大

＝ 目 次 ＝

- 1.西日本活動報告：「中原孝三氏の講演会に参加して」 アミーゴ会西日本代表 鹿内俊一 ...1～ 2
- 2.私とメキシコ：「ボクシング競技における日墨交流の歴史」 在墨ボクシングマネージャー古川久俊 ...3～ 7
- 3.メキシコへの誘い：「2012年メキシコ周遊”ブス”旅行」 海外旅行作家 京免宣昭 ...8～12
- 4.トピックス：「大統領の公式来日」「Cinco de Mayo 2013」「旅たび東洋」「あとがき」 ...7

きな音を立てたり、大声での日本語には随分悩まされました。このため、レストランに行く前に、「イタリアでは飲食の際に音を立てる人は、キッチンと教育を受けてない、教養の無い人と思われるのでやめた方が良い」と言うことにしました。日本ではラーメンやうどんを食べる時に、音を立てるのが当たり前なので、音を立てないスパゲッティの食べ方を教えてあげた事もあります。

中原さんからメキシコからの青果の輸出に関連して、鮮度と味をキープする為に、航空便に固執した理由のご説明がありました。私がメキシコに勤務している間に、幾度か中原さんをお願いして、親戚や故郷の山形の恩師に高級マンゴーを送って頂いたことがあります。当時はマンゴーが比較的珍しい時代でもあり、故郷の恩師からは、「こんな美味しいものを今まで食べた事が無い」との礼状をもらい、こちらとしてもとても嬉しかった記憶があります。

中原さんが書かれた、『どこへ行く サムライ日本、CUO VADIS SAMURAI NIPPON』（CUO VADIS はラテン語で「どこへ行く」の意；私家本）の本を今回の講演会の際に 20部ほどお持ち頂き、講演の参加者に無料で配布させて頂きました。皆さん喜んでおられました。私も一部ちょうだいして読ませて頂きました。

この本の内容は中原さんの実体験に基づくメキシコの日本企業、日本人社会、現地の文化、歴史、またメキシコ人の性格、風俗習慣、民族性など極めて多岐に亘っておりますが、何よりもこの本は、中原さん個人の半生記ではないか



と思います。そして中原さんのお子様と奥様に対する愛情、思いやりを人一倍感じることが出来ました。

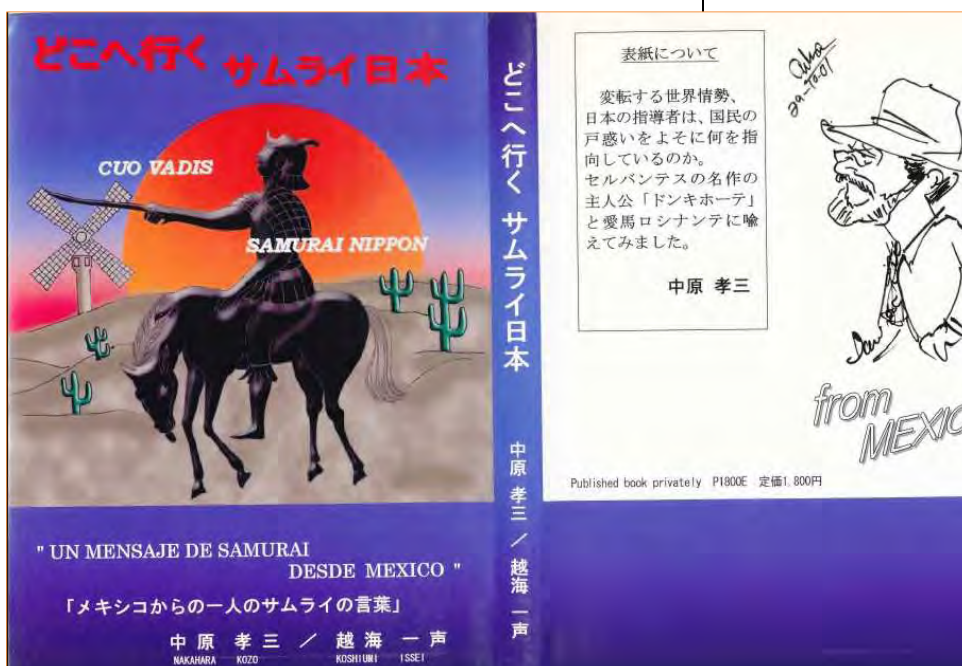
数年前に最初のメキシコへの渡航から数えると、約 50 年振りに日本へ帰国されたわけですが、講演会参加者から、何故日本に戻られたかとの質問がありました。その時のお答えの理由は、いろいろありましたが、一言で言えば日本人としてのアイデンティティの確認のための帰国ではなかったかと思っています。

恐らく 43 歳の時に帰国された際に受けた、RE-ENTRY CULTURE SHOCK と同様のショックを改めて受けられているのではないかと思います。

日本人の精神構造の変化や慣習に耐え切れなかったら、再度メキシコに戻るという選択肢もあろうかと思っています。講演の最後に、現在 80 歳になったが、100 歳まで生きるというお話があり、その気構えと物事へ強い好奇心を持ち続けておられる事に感銘を受けました。

関西在住の幹事も高齢化が進んでおりますので、今後またまに大阪に来て頂き、我々に刺激を与えていただければと思います。

最後に一言、“CUO VADIS SAMURAI NAKAHARA？”
(了)



表紙について
 変転する世界情勢、日本の指導者は、国民の戸惑いをよそに何を指向しているのか。セルバンテスの名作の主人公「ドンキホーテ」と愛馬ロシナンテに喩えてみました。
 中原 孝三



Published book privately P1800E 定価1,800円

ボクシング競技における「日墨交流の歴史」

～ボクシング王国メキシコと日本の挑戦：高校ボクシング部監督の新天地～

メキシコシティー在住ボクシング・マネージャー

古川 久俊

[編集部注：元高校教諭でボクシング部顧問だったメキシコ市在住の古川久俊さんより、ボクシングの名勝負を通じた日墨交流史をご寄稿いただきました。古武士を彷彿とさせるメキシコ人ボクサーと日本人の若き挑戦者の真剣勝負が、古川さんの情熱あふれる活写で蘇ります。貴重な写真も古川さんご提供です。いまや伝説となり神話となったボクシング競技の神髄をお楽しみください。]

はじめに

早いもので、私が日本の高校教師の職を辞し、ここメキシコシティーに辿りついてから、もう七年になります。一般の方には「メキシコ＝ボクシング」と聞いてもピンとこないかもしれませんが、日本でボクシング競技に携わっている人間にとっては、メキシコは「ボクシングの本場」、このラテンの地は偉大なる歴史を持った「ボクシング王国」であり、言葉をかえれば「憧れの地」といっても差し支えありません。

福井県という北陸の田舎で教壇に立ち、ボクシング部の監督であった私にとってもそれは同じでした。40歳を越えてからの来墨でしたが、旅行者として初めてこの地を訪れた時の驚きと感動は、今も忘れることができません。本場の技術の高さと明るいラテンの気質に大いに魅かれた私が、家族や友人、地元教育界の大反対を押し切ってメキシコに移住するのに、さほど時間はかかりませんでした。

最初に自分のことを書いてしまい恐縮ですが、私を含めた日本のボクシング人を魅了するメキシコのボクシングは、実は我が国日本と深い関係にあります。世界的に見れば、両国人とも体格的に似通っており、軽量級に好選手が集中していますから、必然的に世界タイトルマッチという大舞台において「メキシコ VS 日本」の構図は古くからありました。メキシコの世界王者が日本で防衛戦をする、日本の世界王者にメキシカンが挑戦する、メキシコのリングで本場の世界王者に日本の挑戦者が挑む・・・その度に、メキシカンの強さと高い技術に日本の多くのファンが魅了され、あるいはまた日本の挑戦者の勇敢なファイトが本場メキシコのファンの心をとらえ、両国のボクシング界は固い絆で結ばれていったといっても過言ではないのです。

今回、メキシコ・日本アミーゴ会の鴻巣勝明氏より依頼を受け、今、ここに自分の拙文を書いておりますが、ボクシングという日本の皆様にはマイナーなスポーツに日墨両国のボクサーたちの、文字通り「命を賭けた戦い」があったこと、また、その戦いの歴史は現在進行形で今も続いていることを、少しでも理解していただければ幸いです。

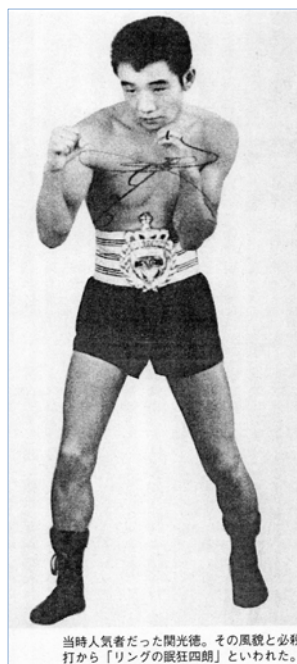
ジョー・メデル：日本をこよなく愛した「ロープ際の魔術師」

日本のオールドファンにとって、ジョー・メデル（本名ホセ・メデル）ほど、その心の琴線に触れたボクサーはいないでしょう。何と、10度も来日し、日本のトップボクサーたちと拳を交え、「リングの親善大使」といった趣がありました。日本のファンから最も愛され

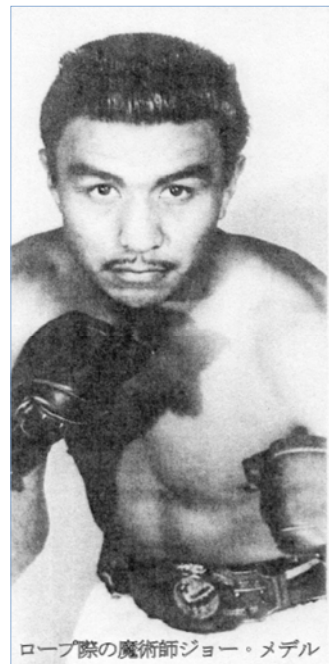
た外国人ボクサーが、このメデルなのです。

さて、時計の針を半世紀前に戻します。当時の日本ボクシング界は、戦前から大活躍し日本のボクシングスタイルの基礎を築いたといってもいい「ピストン堀口」の影響で「根性主義」が一般的でした。指導現場では、一発打たれたら二発打ち返せ！一打たせて打て！といった防御を無視したといってもいい指導が行われていたようです。

そこに登場したのが、本場のカウンターパンチャージョー・メデルでした。メデルのスタイルは、玉砕戦法の日本選手とは違い、ガードをしっかりと固め、相手の攻防を見切ってカウンターで仕留めるといえるものです。メデルは、玉砕戦法が主流の当時の日本ボクシング界に、本場の科学的ボクシングを持ち込んだ「リングの革命児」だったといえます。



当時人気者だった関光徳。その風貌と必殺打から「リングの脱狂四郎」といわれた。



ロープ際の魔術師ジョー・メデル

ジョー・メデル VS 関光徳

1961年（これは私が生まれた年なのです）、メデルは、まず、当時日本の軽量級のトップであった「関光徳（セキ・ミツノリ）」とノンタイトル10回戦で対戦します。関はサウスポーの強打者で、その左ストレートの切れ味は「名刀正宗」と讃えられていた、日本の若手ホープの一人でした。

試合は、若さに乗って関が1Rから積極的に前進し、メデルはロープにつまって防戦一方に見えました。観客もテレビの視聴者も、関がいつメデルをKOするかと固唾を呑んで見ていたといえます。5R、関がメデルをロープにつめ、さあ、止めの左ストレートを打とう

としたその瞬間、何とキャンバスに倒れたのは今まで攻勢一方であった関で、当のメダルは、静かに体を入れかえてリング中央に歩いていました。関の単調な攻撃を見切ったメダルが、関が止めの左を打つタイミングに合わせて、右のカウンターをショート距離で打ち込んだのです。

メダルは、ボクシングはただの野蛮な殴り合いではない、「スピードとタイミングの芸術なのだ」ということを、身をもって示したのです。日本のファンは、メダルの神業とも思える高い技術にため息を漏らし、世界のボクシングのレベルを肌で知ったのです。

ノンフィクション作家の沢木耕太郎氏の著書『一瞬の夏』にも

「テレビのスローモーションに写されたメダルは、ロープにつまんで関のラッシュを浴びているように見えたが、その冷たく黒い目で関の攻撃をじっと見つめていた。打たれていたのではない、打たせていたのだ。まるで猛禽類を思わせる目だった・・・それ以来、長い間、私にとってボクサーとは、ジョー・メダルを指すことになった」

と、この試合に大きな衝撃を受けたことが書かれています。

ジョー・メダル VS ファイティング原田

さて、メダルは、1963年、やはり日本の若手のホープであり、前世界フライ級チャンピオンであった「ファイティング原田」ともノンタイトル10回戦で対戦。「狂った風車」と形容された原田の根性の猛ラッシュに何度かピンチに陥りながらも、らんらんと光る目で相手の攻撃を寸前かわし、打ち疲れを待って、やはり的確なカウンターの突き刺し、6R、リング中央で原田を逆転KOに切って落とします。敗れた原田の闘志も、もの凄いなものでした。何とキャンバスに沈みつつもパンチを振り続け、そして力尽きたのです。



《原田 vs ジョー・メダル第一戦
メダルの右クロスカウンターで原田は鼻の出血》

沢木耕太郎氏の著書にあるように、試合中は猛禽類のような目で冷静に戦っていたメダルですが、試合終了後にコーナーに戻り神に祈りを捧げた後、マネージャーのルペ・サンチェスと抱き合い、涙を流しました。彼は、日本のメディアのインタビューでも、しばしば涙を見せたといいますから、直情的な性格だったのでしょうが、その態度は常に紳士的でした。現代のボク

サーのように声高に対戦相手を罵ったりしたことは一度もなかったのです。

日本の観客、ファン、関係者は、メダルの人柄とその高いボクシング技術に魅了され「ロープ際の魔術師」というニックネームを彼に与えました。メキシコでのメダルのニックネームは「ウイトラコチェ（とうもろこし；彼のヘアースタイルから）」でしたから、いかにメダルが日本のファン、関係者から愛されたかが分かります。

さて、メダルのもう一つのニックネームが「無冠の帝王」です。彼は、前述のように、後に世界バンタム級チャンピオンになる「ファイティング原田」にKO勝ちしますが、4年後、世界タイトルを賭けた再戦では判定負けし、ついに世界のベルトをその腰に巻くことはできませんでした。原田がその屈辱のKO負けをバネに、よりベターなボクサーへ進化したことと、メダルが全盛期を過ぎていたことがその理由ですが、その悲劇性がまた日本のファンに愛された所以です。

一度は完璧なまでに叩き伏せた相手が今は世界チャンピオン、しかし、4年の歳月が、カウンターパンチャーにとって最も大切な反射神経とスピードを奪ってしまっていたのです。健闘むなしく判定に敗れたメダルは、リング上で世界タイトル防衛の喜びに沸く原田陣営を祝福した後、静かにリングを降り、控え室で涙を流したといいます。勝って泣き、負けて泣く・・・。

ジョー・メダル：日本でテンカウント

実は、日本のファンがメダルを愛したと同じかそれ以上に、メダルも日本を愛していました。彼はその20年にも及ぶリングキャリアで、何と、112戦も戦っていますが、その最後の試合が日本だったのです。1974年、すでに36歳になっていたメダルの10度目の来日、相手はオリンピック出場の実績と「KO仕掛け人」の異名を持つ「ロイヤル小林」、後に世界王者になる日本のホープです。一見すれば、日本の若手のホープの踏み台にベテランが選ばれたという図式になるでしょう。しかし、もう伝説にまで昇華したメダルを一目見ようというファンで東京後楽園ホールは超満員になったということです。試合は、3R、得意のカウンターで小林をダウン（判定はスリップ）させるも、6R、顔の古傷が開きドクターストップがかかってTKOに負け。しかし観客が驚いたのはその直後でした。

メダルは「私は、この愛する日本で引退するのだ」といって、その場でテンカウント（ゴングを10回、ゆっくり鳴らす。通常、ボクサーの引退式で行われる）を鳴らすよう頼んだのです。満場の観客は皆総立ちとなり、固唾を呑んで乾いたゴングの音をゆっくりと聞く中、メダルはいつものように両目に涙をためて、愛するボクシングとリング、そして第二の故郷ともいえる日本に別れを告げたのです。世界広し、といえども、異国の地で引退のテンカウントを聞いたというボクサーを、私はメダル以外知りません。メダルの日本への熱い想いが伝わってくるエピソードですね。

梶原一騎原作の不滅のボクシング漫画『あしたのジョー』に出てくる「無冠の帝王カーロス・リベラ」やジョー自身のカウンターパンチ(クロスカウンター)は、このメダルがモデルになっているといわれています。

さて、メデルはメキシコシティのスラム街の一つであるコロニア・ゲレーロのテピートの出身。シティに住んだことのある人には「ああ、あの泥棒市が立つ貧民街か」とピンと来るとおもいます。このテピートは、メデルはじめ、キッド・アステカ、ラトン・マシ



《メトロ・テピート駅での筆者》

アス、カルロス・サラテ・・・など数多くの優秀なボクサーを輩出したシティのボクシングのメッカであり、メトロ B 号線のテピート駅の標識は、ボクシングのグローブになっています。

1938 年に、そのテピートで産声を上げたメデルは、町のケンカ少年として頭角を現しますが、名伯楽ルペ・サンチェスの厳しい指導の下、プロボクサーとして成長し、日本の地を踏み、その情熱をリングで燃やしたのです。日本をこよなく愛したメデルも、2001 年、ガンのため 62 歳の若さで旅立ちます。もう一度日本に行きたいと念じながら・・・。

2004 年に旅行者として初めてメキシコの地を踏んだ私は、当然、メデルとの交流はないのですが、運命とは不思議なもので、メデルの息子メデル・ジュニアと親交があるのです。息子にとって父はアイドルでもあり、父親が親日でしたから彼も大の親日家、やはりテピートに住み、今はシティのレフェリー、ジャッジとしてボクシングに携わっています。これも戦う一家の血でしょうか。

本場メキシコのリングで戦ったサムライたち

ボクシング王国メキシコは、数多くの偉大なチャンピオン、名選手を産んでいますが、そのグレートの人に「KO キング」と呼ばれた世界バンタム級チャンピオンカルロス・サラテがいます。生涯戦績 66 勝のうち KO 勝ちが何と 63！(通算 4 敗)という怪物で、世界タイトルも 9 度防衛 (9KO) しました。

彼もまたテピートの出身ですが、日本の専門誌の依頼で彼にインタビューを申し込んだ時、「日本人ボクサーで知っている選手はいますか？」という問いに、「何といってもシバタ (柴田国明) だ。ティファナで、サルディバルに挑戦した世界フェザー級タイトルマッチ、あのサルディバルが、シバタのスピードに全くついていけなかった (柴田が 12 回 KO 勝ちで世界タイトル奪取)。シバタは、もの凄いボクサーだ！」と最大級の評価をしていました。その横からサラテの妻のネリーさん (歌手のリゴ・トバルの前妻) が、「私は、何といってもセキよ！サルディバルとの 2 度に渡る激闘 (いずれもサルディバルの勝ち) は、メキシコ中を熱狂

させたのよ」と、目を輝かせながら語ってくれました。

カルロス・サラテの輝かしいリングキャリアとその壮絶なる人生にもページを割きたいところですが、本題から外れますので、名王者サルディバルとその世界タイトルに挑んだ二人の日本人 (セキとシバタ) の命を賭けた戦いについて書きたいと思います。

私がアメリカ経由で日本に一時帰国する時に、入国審査などで私がボクシングトレーナーだと知ると、メキシコ系の年配の係官から時々、「セキは、今、どうしている？シバタは元気か？」という問いかけを受けます。

メキシコシティで仕事をしていると、この質問はいつものことです。メキシコ、あるいは広く米大陸のボクシング関係者にとって、セキ、シバタの名前は、このように日本人ボクサーの代名詞になっているのですが、それは彼らの壮絶な戦いが、未だにメキシコ人の脳裏に深く刻まれているからなのです。半世紀近くの歳月が経過しても色あせない戦いとは、一体どのようなものなのでしょう？

私自身もトレーナーの一人ですから、敵地で戦う大変さは身にしみてわかっています。長時間の移動や時差ボケによる体力の低下、気候・風土・食事の違い、言葉の壁、判定の不利・・・など書き出したらきりがなくらいです。その敵地で、絶対的な王者に挑まなければならないとしたら・・・。

ビセンテ・サルディバル：メキシコの赤い鷹

では、世界フェザー級チャンピオン、ビセンテ・サルディバル・・・この絶対的な王者の紹介から始めた



《メキシコの英雄・怪物ビセンテ・サルディバル》

と思います。サルディバルはメキシコが産んだ名王者の一人で、その勇敢な戦いぶりから「メキシコの赤い鷹」というニックネームを持つ、サウスポーの強打

者でした。17歳の若さでオリンピックのメキシコ代表になり、プロ転向後も連戦連勝で世界王座に挑みます。

1964年、場所はシティーのエル・トレオ競技場。メトロ2号線の終点、クアトロ・カミーノス駅にあった闘牛場のことです（残念ながら、数年前に取り壊されました）。

チャンピオンは亡命キューバ人のシュガー・ラモス。この選手も歴史に残るグレートの人です。母国キューバでプロ選手として順調なキャリアを積んでいたラモスでしたが、1959年のカストロによる社会主義革命によりプロスポーツが禁じられたため、愛する祖国や家族を捨ててメキシコに亡命、苦難の末に世界王座につくのです。

ラモスのことを書き出すとサラテ同様ページが足りないのでは簡単に……。ラモスの強打は群を抜いており、王座についた世界タイトル戦では、チャンピオンのデービー・ムーア（米）をKOし、その命を奪いました。ラモスに倒されたムーアは、そのまま帰らぬ人となったのです。

サルディバルも強いが、殺人パンチャー・ラモスの強打はけた外れ！一予想はすでに3度の防衛を果たしていたラモス有利でした。ところが試合は、挑戦者サルディバルが1Rから積極果敢に攻め込み、史上に残る恐ろしい打撃戦になります。サルディバルの強打を連続的に浴びたラモスは顔が腫れ、口から出血し、10R、片足を上げた格好でついにダウン、そして、12R、KOでサルディバルが新チャンピオンの座に着きました。

敗れたラモスは、「満身の力を込めてパンチを打ったが、サルディバルは石の壁のようにビクともしなかった。俺より数段強い。恐怖さえ感じたよ。」と新チャンピオンを讃えたのでした。この結果に対し世界中のファンは、「えー！あのラモスが本当に負けたのか？サルディバルは怪物か！」と驚いたのでした。

サルディバル VS セキ

サルディバルはその後4度の防衛を順調に果たし、5度目の防衛で迎えたのが当時、東洋フェザー級チャンピオンであった関光徳（既述のようにメダルの初来日時の対戦相手、メダルのKO勝ち）です。

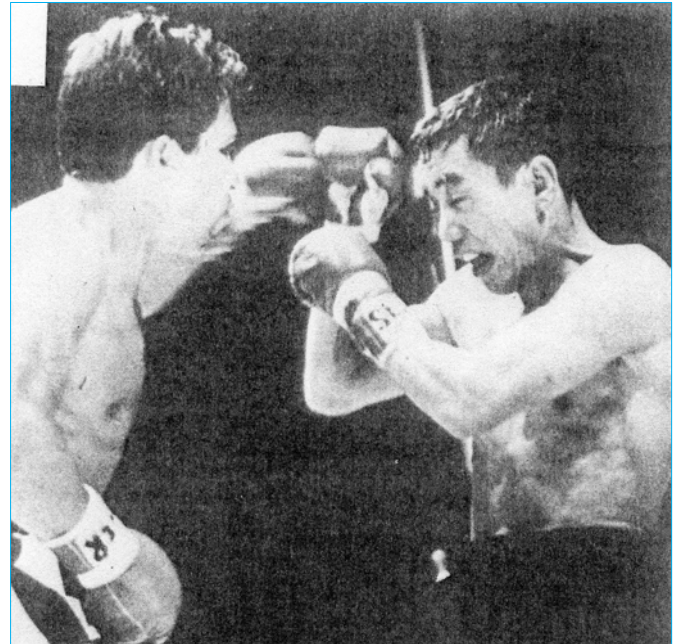
今でも、メキシコ・ボクシング界で語り草となっているこの試合も、シティーのエル・トレオ（闘牛場）でした。シティーに住んだことのある人ならば、標高2千メートルを超えるこの地が、日本に比べ酸素が薄く、試合どころではないことが身にしみてお分かりいただけると思いますが……。今から半世紀前、1ドル＝360円の固定相場制、ドルの持ち出しにも制限があり、日本人にとって海外旅行など夢のまた夢であった時代に、関は、臆することなく敵地メキシコに乗り込み、この怪物に挑んだのでした。

時は1966年。日本人が、本場メキシコで世界挑戦した最初の記念すべき試合が、この「サルディバル VS 関」だったのでした。飛行機による今以上の長時間の移動、情報の不足、そして相手は怪物といわれるチャンピオン。それに立ち向かう関（以下、セキ）の気持ちは、どのようなものだったのでしょ

うか？
試合は、挑戦者・セキが臆することなく攻め、4R、名刀正宗と呼ばれた左フックを決め、何と王者サルデ

ィバルをダウンさせます。チャンピオンは効いていました。ヒザが揺れてKO負け寸前でしたが、プライドでセキの追撃を耐え抜きます。その後、サルディバルは反撃に移り、7R、逆にセキをダウンさせます。ダウン応酬の一進一退の激闘に闘牛場を埋めた観客（何と5万人！）は総立ちになり、判定は……。僅差でチャンピオン、サルディバル。しかし、チャンピオンの右目は、セキの強打でふさがっていました。

多くのメキシコ人は、セキのファイティング・スピリットに感動したばかりでなく、こういう素晴らしいボクサーを産んだ「日本という、まだ見ぬ東洋の国」に畏敬の念を持ったといいます。前述のサラテの妻ネリーさんの一押しの試合です。スポーツが両国の架け橋になった好例でしょう。



《サルディバル VS セキ(関光徳)：エル・トレオの激闘》

セキは、リングを下りれば物静かな青年で、大言壮語することもなく、外国のメディアからは「サッド・フェイス（悲しげな顔）」というニックネームを付けられていました。プライドの高いサルディバルは、この試合内容に満足することができず、セキの再戦要求にダイレクトに応じます。1967年、同じくシティーの闘牛場で行われた再戦はやはり激闘になりますが、7R、セキはサルディバルの連打に屈し、今度はKO負け……。再び、夢破れます。

セキは、試合翌日の朝、ホテルで顔を洗おうとしましたが、両手が上がらず洗えなかったそうです。チャンピオンの連打をブロックしていた腕が腫れあがっていたのです。それくらい恐ろしいパンチだったのです。

マチズモの国・メキシコでは、勝敗は二の次で、強い者に立ち向かう勇気が問われます。セキは、怪物サルディバルとの2連戦で、その名を不滅のものにし、そして伝説となったのです。

サルディバル VS シバタ

さて、次は、柴田国明の挑戦です。セキ戦から4年、1970年になっていました。場所はティファナ。メキシコに住んだ方はご存知のように、ティファナは米国境沿いの町で、高地の影響は受けませんから、柴田（以

下、シバタ) にとっては戦いやすい地です。

1R からシバタは、先制攻撃！スピードあるパンチでチャンピオンを攻め立てます。特に、右ストレートが、シバタの構えたガードの位置からサルディバルの顔に一本の糸で繋がっているかのごとく、面白いように命中します。とにかく、両者のスピードが違います。試合が進むにつれ、サルディバルの顔は腫れ上がり、ダメージが蓄積していきました。チャンピオンは、ついに13Rの開始ゴングに応じることができず、シバタのKO勝ちが宣せられます。メダルと同じく、4年の歳月が、サルディバルからそのスピードを奪っていたのでした。

日の丸をふって歓喜に沸くシバタ陣営、国境の町で、番狂わせが起こったのです。多くのメキシコ人は、驚きました。自分たちの英雄が、ほとんど何もできないまま、東洋の小さな島から来た挑戦者に王座を明け渡したのですから。そして、勝ったシバタを讃えました。この日以来、シバタの名も、ここメキシコで不滅のものになったのです。後に、世界ウェルター級タイトルに挑戦（敗退）したメキシコ人に「ホセ・シバタ・フローレス」という選手がいましたが、「柴田」の名をミドルネームに使っていたのです。

それにしても、メダルと同じく、セキも不運と思わざるをえません。世界王座に着ける力がありながら、挑んだチャンピオンが怪物サルディバル、しかも相手は全盛期、そして敵地でしたから……。セキは、東洋では無敵でしたが、ついに世界のベルトを巻くことなくグローブを置きます。サッド・フェイス（悲しげな顔）で……。

おわりに

以上、日本とメキシコで「伝説」となっている、さらに言えば「神話」になっているボクシング競技の話をもつ、紹介させていただきました。ボクシングに普段、興味のない日本の皆様は、どういう感想をもたれたのでしょうか？

他にも、ミスター・ノックアウトと呼ばれた KO キング「ルーベン・オリバレス（世界バンタム級王者）」に挑んだ金沢和良の死闘（1971年・名古屋）、日本のアイドル王者であった具志堅用高から、その王座を奪った「ペドロ・フローレス」（1981・沖縄）の飽くなき連打また連打、平成のカリスマ・辰吉丈一郎と二度にわたる激闘を繰り広げた、チアパス州ラカンドン族出身の「ビクトル・ラバナレス」（1991・大阪）……等、日墨の熱い戦いの歴史は、枚挙にいとまがありません。

日本の片田舎で公務員として平凡な生活を送っていた私の血をたぎらせ、そして、この地メキシコへと駆り立てた「日墨のボクサーたちの戦いの歴史」……。それから早七年、これらの伝説に負けない心技体そろったチャンピオンを育てようと、日々、奮闘してきましたが、残念ながら遠く及ばないのが現状です。

両国の偉大な戦いの歴史を座右の銘とし、常に敬意を表しつつ、私も、これらの伝説に一步でも近づくことができるよう、努力を続けるつもりです。

(了)

ペニャ=ニエト大統領が公式来日

エンリケ・ペニャ=ニエト大統領が4月7～10日に来日。首脳会談で日本の TPP 参加支持を表明するとともに、共同声明「21世紀における戦略的グローバル・パートナーシップの強化のための共通ビジョン及び行動計画」(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000003114.pdf>) を発表。また第30回日墨経済協議会や国連大学で、両国関係の深化拡大への期待やメキシコ的外交政策について講演。詳細は大統領府ウェブ参照(<http://www.presidencia.gob.mx/>)。



(大統領府ウェブより転載)

シンコ・デ・マヨ・フェスティバル



5月3～4日、代々木公園で第1回シンコ・デ・マヨ・フェスティバル (Cinco de Mayo 2013) が開催されます。5月5日はメキシコ史で重要なプエブラ戦勝記念日。メキシコのみならず米国でもメキシコ系米国人により各地で催事が行われています。日本版は「アメリカス・セレブレーション」をテーマに南北米州大陸全土のお祭りとして挙行とのこと。入場無料。詳細は催事ウェブ(<http://www.cincodemayo.jp/>)。

『旅たび東洋・Tabi Tabi TOYO』

メキシコの日系旅行社ビヤヘス東洋メヒカーノが発行する月刊のメキシコ情報&旅行誌『旅たび東洋』(日・西)を閲覧(<http://issuu.com/tabitabitoyo>)できます。最新アップは4月号で、カンクン特集のほかメキシコでの新しいライフスタイルを提案する楽しい話題とコラムが満載です。ブログもあります(<http://viajestoyo.blogspot.jp/>)。



あとがき：ペニャ=ニエト大統領の来日は TPP との関連で大きく報道されました。他方、大統領の講演は即座に動画が大統領府ウェブにアップされ、日本記者クラブでの会見の生中継を PC で視ました。国家元首の行動や発言を国民に逐一知らせる広報活動の有り様は我が国も見習いたいところです。毎年恒例のリセオ(日墨学院)の日本文化旅行で今年も24名の高校生が6月29日～7月20日に来日予定です。ホストファミリーを引き受けてくださる会員家庭を募集中です。詳しくは事務局までご照会ください。[か20130413]

“ひとり弥次喜多ブス旅行”

～2012年メキシコ周遊紀行・その1～

海外旅行作家 京免宣昭

[編集部注：海外旅行業界 OB の京免宣昭(きょうめん・のりあき)さんより、1 ヶ月に及ぶメキシコのバス(bus=スペイン語でバス)による周遊紀行を石井あけみ幹事の紹介でお寄せいただきました。筆者は現在、NPO 法人シニア大樂の専任講師として「安心の海外旅行」と「世界遺産への旅」を講じて活躍中です。ご寄稿文を数回に分けて連載します。なお、筆者のご了解を得て、編集部が見出しを付し、名所旧跡の説明を旅行ガイドに譲るなど玉稿を割愛し、筆者の「メキシコとの出会い」を主内容とする勝手編集を施しました]

まえがき

2010年、ドイツ南部の小村オーバーアマガウでの Passion Play 2010 の観賞旅行を手始めに、ロングな旅行を開始。足腰の達者な内に旅行をとという素朴な願いから、11年春季の英国周遊、秋季のインド周遊を成功裏に終了。今回、世界遺産の認定数でインドと双壁のメキシコに照準を合わせて11年末から計画を練り、別掲の日程で念願のメキシコ周遊旅行を実現した。

訪問都市はメキシコシティから始まり、テオティワカン、ポサリカ、モレリア、グアナファト、サンミゲル・デ・アジェンデ、ケレタロ、クエルナバカ、オアハカ、プエブラ、ベラクルス、トラコタルパン、ビジャエルモサ、パレンケ、カンペチェ、ウシュマル、メリダ、チチェンイツァー、カンクン、トゥルム等で、その他主要訪問地近郊の多くの小都市を巡ってみた。

尚、移動に当たって、都市間は航空機及び長距離バス、見学地は地下鉄、トラム、市・ローカルバス等を利用し、ドライバー・車掌や現地の方々に聞きながら乗降し、チケットを買ったが、とても協力的であり、お世辞抜きにメキシコの方々のコーディネートは素晴らしかった。インド旅行の時もそうであったが、メキシコはそれ以上である。タクシーの利用は、早朝等やむなく空港・ブスターミナル/ホテル間を利用する等の以外は、ほぼ利用することはなかった。

3月29日 成田発～アトランタ経由メキシコシティ着(航空機)
 4月02日 メキシコシティ～ポサリカ往復(バス)
 4月04日 メキシコシティ～モレリア(バス)
 <ここまで第14号掲載。以下次号へ>
 4月05日 モレリア～グアナファト(バス)
 4月06日 グアナファト～サンミゲル・デ・アジェンデ(バス)
 4月07日 サンミゲル・デ・アジェンデ～ケレタロ
 ～メキシコシティ経由クエルナバカ(バス)
 4月10日 クエルナバカ
 ～メキシコシティ経由オアハカ(バス/航空機)
 4月14日 オアハカ～プエブラ(バス)
 4月16日 プエブラ～ベラクルス(バス)
 4月16日 ベラクルス～トラコタルパン往復(バス)
 4月18日 ベラクルス～ビジャエルモサ(航空機)
 4月20日 ビジャエルモサ～カンペチェ(バス)
 4月23日 カンペチェ～ウシュマル～メリダ(バス)
 4月24日 メリダ～チチェン・イツァー往復(バス)
 4月26日 メリダ～カンクン(バス)
 4月27日 カンクン～トゥルム往復(バス)
 4月29日 カンクン～アトランタ経由～4月30日成田着(航空機)

出発直前の3月22、24日、故郷富山県黒部市での小水力発電所(1000kw)の開所式出席及び「元日本兵故横井庄一さん発見通報時の経緯40周年」講演という役目を無事に終え、急ぎメキシコ旅行の準備をし、慌ただしく出発した。それでは早速本論に入ろう。

[編集部注：筆者の京免さんはグアム島駐在時の1972年1月24日、横井さん発見の第一報を日本へ伝えた]

いざメキシコへ

3月29日(木)：午後15時40分、成田発デルタ航空でアメリカのアトランタへ向かう。座席はほぼ満席。定刻通り現地時刻15時20分到着。アメリカでの入国手続きはESTA(電子渡航認証システム)にて行い、係員は指紋と写真を併せて撮影した。乗り継ぎ便のための手続きは、ベルト・靴まで厳しく調べる状況であった。約2時間のトランジットのためマックでセットを注文し、旅行の際は必ず家内手作りのおにぎりを余計目に持参するので、そのおにぎりも併せて食し、残りのおにぎりはメキシコ到着後食べることにする。

17時35分、アトランタを出発して、メキシコシティに19時18分到着。メキシコでの入国手続きは簡単で、特に日本のパスポートはスルーの感じである。How many days? と聞かれ One month more. と答えると、一寸驚いた様子で Good luck. と係員は笑顔で答えてくれた。次に荷物受け取りのためターンテーブルへ向かい、少し待ったが無事出て来た。その間、両替しようと思っただけを探すが内部には無く、出口を出たロビーにあるとのことであった。荷物を持って係員の所へ行くかどうか荷物を開けると云うので、全部オープンしてどうぞと云うと、ほんの少し手にとって OK という合図をした。自分自身、かなり以前にシンガポール空港で詳しく調査されて以来のことであった。到着ゲートを無事出て早速両替所へ向かい両替し、その足でタクシーチケット売り場へ行きチケットを購入して待つと、結構大型のタクシーの順に当たり、ドライバーにホテル名と地図を渡し、ソカロ(旧市街)地区の有名ホテルの比較的近くであると云うと大きく領いてくれた。

宿泊ホテルに無事到着し、チェックインの手続きをするため予約確認書を見せ6泊すると云うと驚いた様子であった。ホテルスタッフに出来るだけ Quiet room please. とリクエストすると OK と二つ返事。実際最上階の奥まったツインの部屋で、シャワー室、トイレ、洗面所は新品に思えるほど清潔で、且つ水の出と排水がとても良く快適であった。

チェックインの際、メキシコシティの地図を入手し、地下鉄の駅、見学予定地にマークをしてもらった。時刻は既に午後9時に近いが、早速、湯沸かし器を取り出してお湯を沸かし、お茶、味噌汁とおにぎりセットで今晚の夕食とした。メキシコと日本との時差は15時間あり、日本時間は3月30日(金)の丁度お昼の12時頃である。いよいよ明日からメキシコシティの見学開始であるが、見学の前に次の行動予定を円滑にするためのバスのチケットの事前購入と見学予定地を決めて就寝(筆者注：バスとは云わず最後までバスと呼ぶ

ことにする)。尚、メキシコシティの標高は 2240m で多少標高差による影響があることを意識しておこう。

メキシコシティ：ブスチケットの事前購入

3月30日(金)：普段通り起床し、地上階のレストランに行きアメリカンの朝食を取りながら、ウエイトレスにしばらく滞在するので宜しくと云うと笑顔で答えてくれた。精算のためビルにサインしようとする、キャッシュでないとダメだと云われ、何故ダメなのかと聞くと経営が違うことが判明。因みに朝食代 50 ペソ(約 300 円)。これに関連して、チェックアウト前夜のハプニングのことは後日述べることにする。

朝食後、ホテルスタッフと地図を見ながら、ブスチケットを買うステーションが二ヶ所あるが、ホテルより近い場所を再確認し、歩く方向を教えて貰って行くことにする。その場所は、ホテルより 15 分程度と予想し、10 時少し前に到着するように出掛けた。何故、敢えてブスチケットを買うのかと云うと、メキシコの列車はほとんど廃止されており(ほんの一部区間のみ運行)都市間移動はバスがメインでその他、航空機しかない。従って、ブスターミナルは大規模で且つ郊外にあり、メキシコシティの場合、東西南北の行き先方面別に 4 ターミナルが設置され、終日乗降者で混雑するため事前にチケットを購入しておく方がベターであると聞いていたからである。但し、ターミナルで購入するより少し割高なことも事実。天気は、ほぼ快晴。

ホテルを出る際、ソカロ地区にある当ホテルの位置や公衆電話の確認から始め、直ぐ近くの屋台キオスクの叔母さんから 100 ペソのテレカを購入。昨年インド旅行の際、電話をかける手段がなかなか見つからず電話をしなかったため(総じてホテルからの国際電話は高額である)、家族が何回もホテルに電話をかけても繋がらず心配をさせた経緯があったため(インドでは公衆電話はなく携帯電話の世界)、今回は早めに対応しようと思う。

歩いて行くと地図通りのメルカド(市場)があり、大きな通り、メトロの駅、大学等を通り過ぎながら、かなり大きな教会の前に来た。丁度観光客らしい外国人も入ろうとしていたため一緒に入り、メキシコで最初のお祈りをする。地図には掲載されておらず、内部はかなり質素であったが、外観はかなり大きい。チケット売り場は、この近くのはず。

歩きながら或ることに気付いた。それは、道路工事等はあちこちでしているものの、道路にゴミがほとんどない。しかも少人数だが道路を清掃する人達も見かけた。これについては後日、より詳細に述べることにする。教会を出てから少し歩くと目的地のチケット売り場に辿り着く。実は、大通りより建物の門をくぐるような感じの奥まったところにあり分かりにくく、3 回ほど隣接建物の人に聞いてやっと位置が分かった。午前 10 時に 5 分前である。事務所の鍵はかかったままで、別の事務所を出入りする人たちが 10 時には来るよと云ってくれたので、もう間もなくだと思い待機していたが、5、10、30 分待っても誰も来ない。40 分待ってようやく気風のいいお兄さん風の係員が急いで鍵を開け、**One moment please.**と云って何かトラブルがあったような感じに聞こえたが、首で携帯電話を押

さえながらスペイン語でやり取りをしていた。10 分位で **Gracias!**と云いながら **May I help you?**と英語で親切に対応してくれているところへ、アシスタントの **Señorita** が出勤して来て代わってくれた。早速当方は、この一週間の間に行く予定のテオティワカン、エルタヒン及びモレリアへのブスチケットを購入した。必ず、名前、日時と座席番号を入力するシステムで、10 分もかからなかったが、私の後ろには既に数人が並んでいた。これで、次の移動手段も確保したので安心して、メキシコシティを動き廻れるとホッとしながら、図らずも「メキシコ時間の存在」を発見した。

【編集部注：筆者は徒歩で市内見学に出かけてカテドラルを訪れ、裏手のレストラン 2 階でテンプロマヨールを眺めながら昼食後、国立宮殿、サンイルデフォンソ学院、文部省、ベジャスアルテス、ディエゴ・リベラ壁画館を巡る。詳細説明は旅行ガイドに譲り割愛する】

メキシコシティ：最初の夕食

その後、タイルの家や真向いの教会等を散策し、近くのヒルトン・メキシコにて遅めのアフタヌーンティを飲みながら時計を見ると既に午後 6 時近くになっていた。日没の時刻は 7 時過ぎとのこと、道理で未だ日差しが強く明るいことが納得。これで初日の見学個所は全て予定通り完了し、徒歩 5 分程度でホテルへ着く。歩きながら初日の夕食をどこで取ろうかと迷いながら、最初の夕食はホテルで取ることにし、メキシコ料理を賞味してみることに決定。

朝食の際とは別のウエイトレスであったが、メニューを見ながら、先ずスープはチキンコンソメを、サラダは後日にし、メインは日本で云うポークカツレツと食後のブラックティをオーダーした。最初にパンとサラダのようなものが出て来たが、そのサラダはトマトやオニオン等を小さく角切りにし少し味付けがしてあり結構美味しく、私はそのまま食べてしまったが、パンなどに挟み込んで食べるのが一般的だとのこと。サラダをオーダーしなくてよかったと思う。

実は、私にはスープへのこだわりがある。それは煮え立つ位の熱いスープであることで、オーダーの前にそのことを話すことにしている。いよいよチキンコンソメが出て来た。オーダー通り結構熱く、味はコンソメより塩味が効きすぎているように思ったが、まああの味。スプーンですくうと米粒が入っている。メキシコではスープにライスを入れると云うことを知った。後日のローカルレストランでは、ご飯のお代わりがあった。そしてメインのカツレツが出て来たが、予想通り草履大の大きさで、半分程度消化するのにひと苦労であったが、揚げたてで美味しく頂いた。私は現役の頃から、海外旅行に行く場合、ドレッシングとお醤油を持参することになっている。早速、お醤油をこのカツレツにかけたことは言うまでもない。やったね。そしてブラックティで本日の締め。お会計 120 ペソ(約 750 円)。明日は、いよいよ念願のテオティワカン遺跡の見学だ。

テオティワカン

3月31日(土)：テオティワカン遺跡はシティから約 50km 北方に位置するアステカ人のメキシコ最大の宗教都市遺跡であり、彼らはどこから来てこのような都市を造ったのか、また AD8 世紀頃突然滅亡した謎は

未だに解明されていないという。

今まで、エジプト、ギリシャ、インド、中国、イラン、トルコ、イタリア等の古代遺跡を見た経験から、勝手な想像を巡らしながら今回、ようやくテオティワカン遺跡が見られる喜びに浸りながら、ホテルを5時半に出発し、メトロ駅 Juárez まで約5分、初めてのメトロだ。回数券はなく、今後のことも考慮して6枚の個札を購入。1枚3ペソ(約20円)である。メキシコ・ノルテ(北方ブスターミナル)まで、途中駅で1回の乗り換えが必要である。参考までに、メトロ3号線は幹線で、山手線並みのダイヤである。チケットは最初に入れるだけで、下車の際は遊園地スタイルで通り抜ける。凡そ25分位で下車駅到着。地下鉄駅とノルテは連絡しており、地上に出ると巨大なブスターミナルに一瞬たじろいだ。

バスは午前7時15分発で、先ず、最初にバスの出発ターミナルを探す必要がある。インフォメーションがあるのでバス会社名と行き先を告げると、最も端の当該バスのカウンターへ行くよう指示される。大きなバッグがある訳でもなく、通常のペースでカウンターへ行ってチケットを見せると、バス待合室に案内されて待つように指示される。バスの案内は電光掲示板とアナウンスで案内しているが、スペイン語は理解不可のため30分ぐらい前に聞けばいいかなと思ひ、ターミナルを散策しながら、パン屋でドーナツを買い、コーヒー屋さんで座って朝食代わりにした。ここのドーナツもコーヒーも安く美味しいため、大いに気に入り、スナックは最後までドーナツになってしまった。結局、バスの前に並んでチェックインの形を取ったのは、出発10分前位であった。

バスのドライバーにテオティワカン下車の合図を依頼し、高速バスは快適に走行し幾つかの停車をしながら約1時間で到着。ドライバーは帰りも同じ場所にバスが来るからと云うので、安心して遺跡の入口に向かおうとすると、とても良い匂いがするので何かと思ったら屋台の蒸しトウモロコシであった。早速、1本頂く。熱々でとても美味しかった。

遺跡の入口は、正面入り口を含めて4カ所あり、バスが着いた場所は入口 No.1 である。屋台のお兄さんにこの道でいいのか尋ねると、もう直ぐだよと云ってくれた。歩いて行くと遺跡入口が見え、早速チケットを購入して Museo (博物館) は?と尋ねると、正面入り口近くにあり、ここの遺跡群を見学してから道順に行けばいいと丁寧に案内してくれた。これは結果の話であるが、この入口 No.1 は見学にとっても便利に出来ていることが後で分かる。その理由は、広大な遺跡を順序良く見学出来、最後は、No.3 からバスに乗って、シティへ戻ることが出来たからである。無論、最初に何を見学するかによって、順序は大幅に変わるが、強い太陽の日差しの下、広大な遺跡巡りをする場合、やはり順序立てが必要であろう。

【編集部注：以下、筆者による主要遺跡の概要説明は割愛】

テオティワカンの主要な出土品は、シティの国立人類学博物館に収蔵、展示されている。多少の発掘品は、正面入り口を入場して直ぐ左手の方向に博物館があるので立ち寄って見てほしい。尚、遺跡内には数多くの土産品販売者が群れているが、正面入り口周辺等にも

多くの土産品店やレストランが点在している。参考までに入口 No.2 は太陽のピラミッドから死者の道を挟んだ延長線上にあり、No.3 はジャガーの宮殿の先にある。私は、No.1 から入って No.3 からシティに戻った。ガイドブックにあるように太陽の日差しが厳しいことが良く分かったので、次の遺跡見学の際は必ずハットを買おうと決めた。

遺跡見学も十分楽しんだにも関わらず少し時間の余裕があるので、ノルテからさほど遠くない地点にあるグアダルペ寺院を見学することを決め急遽、シティへ戻ることにして No.3 地点に急ぐ。5分も待たない間にシティ行きのバスが到着。ドライバーにグアダルペ寺院に行きたいが近くで降ろして欲しいと話したところ、近くに来たら合図すると快く受けてくれ、大変有難かった。やがてメトロのラインが見えて来て、ドライバーはここからとても近いから確認するようにアドバイスをくれた。下車して通行人に聞いてみると徒歩10分もかからないことが分かり安心して、道を急ぐ。

グアダルペ寺院

グアダルペ寺院は、メキシコ人にとって重要な信仰の支えともなっているカトリック寺院だが、中でも「グアダルペの聖母」は黒い髪の毛と肌は褐色で、自分たちに重ね合わせて信仰心を高めたとも云われ、特に貧しい先住民の人達の強い支持を得ている。間もなく、明らかに参道のような道に出会うと共に祈りに向かう人々の群れにも遭遇し、その中に障害を持った人、足を引きずりながら歩く人や膝下で歩く人等にも出会った。

境内に入ると広場があり、正面には寺院、左手には代々木体育館のような新寺院が建っており、個人、小グループや団体等のお祈りする人で大混雑の状況であった。最初に寺院でお祈りし、次に新寺院に向かい、入場するのに一苦勞で、有名なグアダルペの聖母の絵は、2機の平行エスカレーターに乗ってお祈りしながら観賞するシステムになっているのには驚いた。全部で5往復もする。本物と一緒に撮影することは不可能なため、スーベニアショップのそばに等身大のグアダルペの聖母のフェイクが置いてあり、記念撮影をすることが出来る。ショップで、記念品を購入。中身は内緒だ。ともかく大勢の信仰者の熱気に圧倒されたまま、帰路につく。メトロの駅まで10分弱、次の駅で乗り換えて3号線で一直線。無事 Juárez 駅に到着し、ホテルに戻った。

今日はとても充実した一日であった。実は昨晚、蚊が飛んでおりホテルでスプレーを借りたが、今後も予想されるので途中スプレーを購入。後日、結構重宝することになる。明日は国立人類学博物館の見学だ。

国立人類学博物館とチャプルテペック城

4月1日(日)：早朝6時半(日本時間21時30分)、ホテル横の公衆電話を利用してテレカで国際電話を自宅に入れたところ、エープリルフルにも関わらずとても簡単に繋がる。しかも、3分程度話しても安価で、テレカの額面は100ペソだが、125ペソ分利用可の優れ物にびっくり。家内も、安心した様子、これで電話はOK。携帯電話なんか全然不要だよーん。

それから朝食。朝食後、地図を広げてメトロ駅の乗降駅を確認する。ホテルから乗車駅まで5分もかからないが、博物館下車駅までは、2回の乗換が必要だ。開館は朝9時。早速、乗車駅へ向かう。予定通り、2回乗り換えて下車駅到着、駅係員に博物館への道を尋ねると右方向の大通を真っすぐ5分ほど歩くと左側にあると云う。

博物館到着、開館10分前。既に外国人の小グループが待っており、話しかけると、オーストラリアのメルボルンからだ云う。彼らの旅行は豪華で、ハワイを経由してメキシコを巡り、しかもパナマ運河を船で航行してから帰国すると云う。私は日本人で、初めてオーストラリアを訪問したのは1969年、シドニー、キャンベラ、メルボルン、アデレード、アリス・スプリングス、ダーウィンだったが、ダーウィンではJapと云われ、戦争博物館の見学は出来なかった話をすると、旧日本軍がダーウインを空襲し死傷者が多く出たとの答えで、私もその事実を知りつつ話したのだが、彼らの方からは当然のような答え。それよりTsunami & Nuclear Power Plantのことを詳しく聞かれ、日本は今、大災害の対応で大変な状況にあり、皆様方の助けが必要である、是非どういう形であろうともアシストして欲しいと。そして、日本は必ずこの大災害を5、10、15、20、30年の間にOvercomeすると話すと、メンバーの人達は、こぞって日本の復興を信じていると云って握手を交わした。

その内に9時となり、開館したが、チケット売り場の前で行列となってしまった。チケットマシンの故障だ。10分弱待っても回復せず、アナログ的方法でようやく入場するが、時刻は9時20分過ぎである。

メキシコ各地で栄えたテオティワカン、マヤ、トルテカ、アステカ、オルメカ等メキシコ古代文明の主な発掘品は、ほぼ当人類学博物館に収蔵の上展示されており、各地の遺跡群を見学する前に当博物館を見学することは不可欠である。しかも、当博物館の展示品は極めて分かりやすく展示されている。古代歴史や遺跡関連は全て1階に、2階は民族学フロアとなっている[編集部注：個々の展示室の概要説明は割愛]。当博物館には、メキシコ壁画運動の一翼を担ったホルヘ・ゴンザレス・カマレナ、カルロス・メリダやルフィーノ・タマヨの壁画が展示室にあるので観賞をお忘れなく。ただ、当博物館で残念なことは、展示品解説が全てスペイン語になっており、音声案内の英語版を利用して理解に努める。博物館の見学が終わったのは12時半をとくに過ぎており、館内のカフェテリアで簡単な昼食を取りながら休憩し、次のチャプルテペック城への行き方を調べる。

国立人類学博物館へ来た道を左(東方向)に10分程度歩くと、右側に近代美術館があり、そこを通り過ぎて右前方の高台にチャプルテペック城が見えてくる。登り口には可愛い送迎列車を待つ大勢の人が並んでいた。それを利用せずに歩き始めたところ、途中でかなりの距離があることに気付くが、やむなく城入口まで15分程度かかってようやくたどり着く。元来、ここはディアス大統領夫妻公邸であったが、現在、歴史博物館として公開されている。また、お城からのシティの眺望はとても素晴らしい。尚、入場の際、お菓子類やペ

ットボトルは没収されるので注意が必要。この日は土曜日のためとても混雑していたが、帰路は送迎列車を利用して下ってみた。

この日はここまでにして、アポイントを取らなければならない見学箇所があるため、ホテルに戻った。それは建築の革命家と云われるルイス・バラガンが手掛けたルイス・バラガン邸(世界遺産)及びヒラルディ邸見学のアポを取るためである。ところが、滞在中両邸ともアポを取ることが出来ずアポなしで行くことにした。明日は、早朝の長距離バスで、ベラクルス州のエルタヒン遺跡の見学である。



ボサリカとエルタヒン遺跡

4月2日(月):ノルテ(北方ブスターミナル)発午前6時のバスで、ベラクルス州のボサリカという町まで行き、更に乗り換えて見学地エルタヒン遺跡に向かう。

実は、早朝大変なハプニングが起こった。それは、4月1日の午前零時から夏時間になるため、時計が1時間進むのである。私は午前3時半に目覚ましをかけて、午前4時半にタクシーでブスターミナルへ向かう手配をホテル側に依頼しておいた。タクシーは約束通り来ており、フロントから催促の電話が鳴る。What happens? と寝ぼけ眼で答えると、もう約束の4時半を過ぎていているという。What? It's three thirty now.と答えるとSummer time began from yesterday, sir.とフロントが云う。ここで初めて我に返って急ぎ支度をして出発したが、15分遅れであった。タクシーでターミナルまで約30分弱要し、5時15分頃到着。直ちに6時発バスの乗り場を確認し、スナックを食しながら待機。出発10分前にチェックインで並び、水ボトルとスナックが支給されて、乗車した。

いよいよ出発という段階で、やはり何かがあった。それは、全員着席すると、公安がひとりひとりビデオ撮影するではないか。メキシコ旅行全体ではこれが最初で最後であったが、当初は驚いた。州にまたがる犯罪やテロ等を防止するための措置であろうと理解した。

バスは当初高速道路を快適に走行していたが、半分程度来た時点で一般道に降りて走行すると同時に、かなり高い山越えをしながら走る。途中の丘陵地帯には石油を汲み上げる井戸等も見かけけるようになり、原油を運ぶ大きなタンクローリーにも出会った。約5時間半でようやくボサリカのバスターミナルに到着。帰りのバスを確認して、続き棟にあるローカルバスのターミナルに行き、エルタヒン行きのバスを尋ねると、間もなく出発のバスがあると云うのでラッキーと思わず笑顔。尚、このバスは、街中にある中央ブスターミナルを経由して行くとの説明があった。

小さな町にも関わらず、どういうわけか、活気があると云うか人や車が多いような気がする。尋ねてみると、やはり原油の産出とインフラ整備などの恩恵でか

なり潤っている町のようなのである。バスが発車して中央ブスターミナルへの入出時、車の混雑でかなりの時間ロスをしたが、乗車して約 25 分経過した頃、ドライバーが次のステーションだよと合図する。いよいよ、エルタヒン到着だ。ステーションには、Welcome to El Tajin のような標識が立っている。遺跡まで徒歩約 10 分。丁度、ランチタイムで早速レストランで昼食を取り、近くのお土産屋さんで、日焼け防止のためつばの広いハットを購入する。

エルタヒン遺跡（世界遺産）は古代ベラクルス地方の祭祀遺跡で、タヒンは雷や稲妻を表す言葉だと云う。遺跡入口へのアプローチの周りには、多くの土産品店やレストランがあり、小広場では、当地方トナカ族によるポラドーレスの儀式という宗教的パフォーマンスを行っているので観覧。これは、高さ 30m を超える神木の先の綱で足を縛り、逆さづりになった 4 人が、回転しながら地上に降りてくるというベラクルス地方一帯に伝わる宗教的伝統行事である。4 人の衣装は、鷲をモチーフに赤が基調となって鮮やかである。但し、現在の神木は鉄柱に代わっている。

その先に遺跡入口があり早速入場。係員が Museo を観てからと云うので一巡することにする。古代トナカ人の土偶等、ユニークな出土品が展示されている。友人より 5 本の指に入る遺跡だと勧められていたので、期待に胸が高まる。参考までに遺跡の入口は南にあり、北方方向に向かって遺跡が点在しており、見学しやすい遺跡でもある【編集部注：筆者による主要遺跡の説明は割愛】。

シティに戻るバスでハプニングが発生した。予約済みのバスを一番早めたいのでどうかと尋ねると、実はその便は満席だが、10 分遅れで 16 時発の臨時バスがあるのでその便なら OK だと云う。この臨時便でも当初便の帰着より 1 時間以上早く帰ることが出来るので、渡りに船と思い臨時便に変更することを決定。実際に乗車してみると、私とドライバーのみで、その他の乗客は一切なし。即ち、当該バスは私のためのチャーターバスで、しかもシティまでノンストップ。何か面映ゆい感じである。到着後、目一杯 Gracias を連発してホテルに向かう。ああ一愉快的な、満ち足りた気分。

明日は、シティ最後の日だ。

メキシコシティ：最後の日

4 月 3 日(火)：今日は非常に忙しい。何故なら、アポが取れなかったルイス・バラガン邸とヒラルディ邸への訪問も予定しているからである。予定としては三文化広場、ポリフォルム・シケイロス、クイクイルコ遺跡、オリンピック・スタジアム、メキシコ国立自治大学、フリーダ・カーロ博物館等である。

【編集部注：以下、訪問先の説明は割愛し交通手段のみ抜粋転載】

三文化広場へはメトロで二つ目の駅下車、徒歩 10 分程度で到着。ポリフォルム・シケイロスには、初めてローカルバスを利用してメトロバスの乗り場に向かう。メトロバスは軌道の上を走行するバスで、市電に代わる乗り物で市民の利用度も高く、乗る際はスイカのようなカードを購入しチャージをしながら利用する。クイクイルコ遺跡へは、さらにメトロバスで南に向かってオリンピック・スタジアムやメキシコ国立自治大学を通り過ぎてゆくと、間もなく Villa Olímpica 駅下車、徒歩約 10 分で紀元前の古代の祭司遺跡クイクイル

コに到着する。オリンピック・スタジアムへはメトロバスに戻って Dr. Galvez 下車、徒歩約 10 分で到着する。リベラ制作のラテンアメリカを象徴する巨大なコンドルとメキシコを象徴する鷲がスタジアムを引き立てている。実はプラサ・ロレトショッピングセンター隣の、フランスの彫刻家オーギュスト・ロダンの世界有数のコレクションを誇るソウマヤ美術館を観てからランチを取る予定であったが、休館のため見学することが出来なかった。メキシコ国立自治大学 (UNAM) にはスタジアムから地下道を歩いて 5~6 分で大学構内に行くことが出来る。当大学はメトロバス数駅に亘る規模を持つラテンアメリカ有数の大学である。

次に、タクシーでフリーダ・カーロ博物館に向かう。フリーダ・カーロ博物館は女流画家フリーダ・カーロの夫リベラが夭折した夫人の生涯を保存するために私邸を開放した博物館である。2 人の作品、アトリエや私生活の一端等がコンパクトに整理されており、ファンにとって垂涎の博物館である。メトロ駅まで約 10 分、20 世紀を代表する建築家ルイス・バラガンの建築を観るべく向かう。ルイス・バラガン邸（世界遺産）の見学は、アポが取れなかったので直接門前で交渉したが、やはり不可であった。残念。ヒラルディ邸もアポなしであったが、私邸にも関わらず丁寧な対応で感謝、感謝である。ヒラルディ邸は、バラガンの代表作であり且つ最後の作品となった。鮮やかな色彩、水や光を計算し尽くして生み出す装飾等圧倒されるのみである。

夕食時のハプニング：されどチラシ

シティでの見学はこれで終わりとなるが、充実した一日でもあった。やはり、シティを当初の 7 日間にすれば良かったとの思いが頭をよぎったが、これでよしとしよう。

無事ホテルに戻り、シティ最後の夕食をどこで取るかと思いつめぐらしてエレベーターに乗ると（午後 6 時半頃）、レストランの Today's Special Menu としてローストビーフの案内が張ってあるではないか。そろそろ肉やサラダ等が食べたいと思っていたので、ぴったりフィット。部屋で少し整理をしながら、ほんの少し 7 時をまわってレストランに行き、スペシャルをオーダーすると Sir, that menu finished. と意外な返事を云うではないか！ What are you saying? Moment. と云って、先ほどのエレベーターに張ってあるチラシと一緒に見ようと云って持って来た。良く見るとメニュー内容と価格のみが表示され、終了時間や制限条件等の表示は一切ない。このチラシを作ったのはホテルスタッフで、そのスタッフとレストランマネージャーも同席しての議論となってしまった。

結果はどうだったかと云うと、ホテル・レストラン側は平謝りに終始し、このメニューでの夕食はなしとなった。但し、私は、もしここに多くの人がこのメニューをオーダーした場合、絶対に解決しないと注意し、最小限のチラシ作製方法を教えてケース・クローズ。

最後の夕食は不可思議な形となったが、別メニューを美味しく頂いて満足。いよいよ、明日から、コロニアルシティのモレリアへ出発だ。

<以下次号掲載>